

## 冬の奥行臼散策デーを開催しました。

2月4日（日）参加者17名で開催しました。奥行地区に所在する旧標津線跡、旧村営軌道風蓮線跡、旧浜中線の約1kmをカンジキで散策し、夕暮れ時の旧奥行臼駅逦所の写真撮影を行いました。

参加者は、冬の文化財巡りをとおして、かつての風景に想いを馳せていました。



## ふるさと講座自然系第3回目 冬の野鳥観察会を開催しました。

2月18日（日）参加者7名で開催しました。講師は、野付エコ・ネットワークの藤井薫代表です。郷土資料館にて、この時期多く見られるオオワシ・オジロワシについての説明を受けました。その後、風蓮湖に向かいました。氷下待網漁の最中だったこともあり、雑魚に群がるオオワシ・オジロワシを見ることが出来ました。オオワシは、5千羽近く生息しており、風蓮湖では、多い時にはその内の1割の500羽近く確認されているそうです。また、春別川河口では、ベニヒワやミコアイサなどを観察しました。天候も良くお目当てのワシを観察する事が出来ました。



## ふるさと講座歴史系第3回目 撿文・アイヌ文化～窪みが残る古代集落遺跡群を巡る～を開催しました。

2月25日（日）参加者5名で開催しました。はじめに、郷土資料館で旧石器時代からアイヌ文化期についての歴史を振り返りながら、町内の各時代の遺跡について説明を受けました。その後、車で移動し、床丹1遺跡、床丹1チャシ跡を見学しました。大形の竪穴住居跡の形、深さ、間隔などをじっくり観察しました。チャシ跡については、道路の建設により大部分が失われていることも見ることが出来ました。身近にある古代遺跡を巡り、当時の様子を想像することが出来たかと思えます。

## 「メナシのアイヌとともに生きる～加賀伝蔵・松浦武四郎・南摩綱紀～」その7 松浦武四郎と加賀伝蔵の出会い

松浦武四郎は、幕末に近世日本社会から蝦夷地と呼ばれていた北海道を6回踏査しました。幕末の探検家・アイヌの良き理解者として、明治維新後は当代随一の「蝦夷地通」として新政府による北方政策に関わり北海道の名付け親と言われる人物です。

蝦夷地の様子を詳細に記録した武四郎の史料には、メナシ地方のことも多く記録されています。

『戊午第十八巻東部志辺都誌』『近世蝦夷人物誌農夫茶右衛門』『戊午知床日誌』には、シレットコへの調査のため、土地に詳しいアイヌを伝蔵に依頼していることや、アイヌの茶右衛門の勧めにより行った野付半島での農耕のことが、紹介されています。

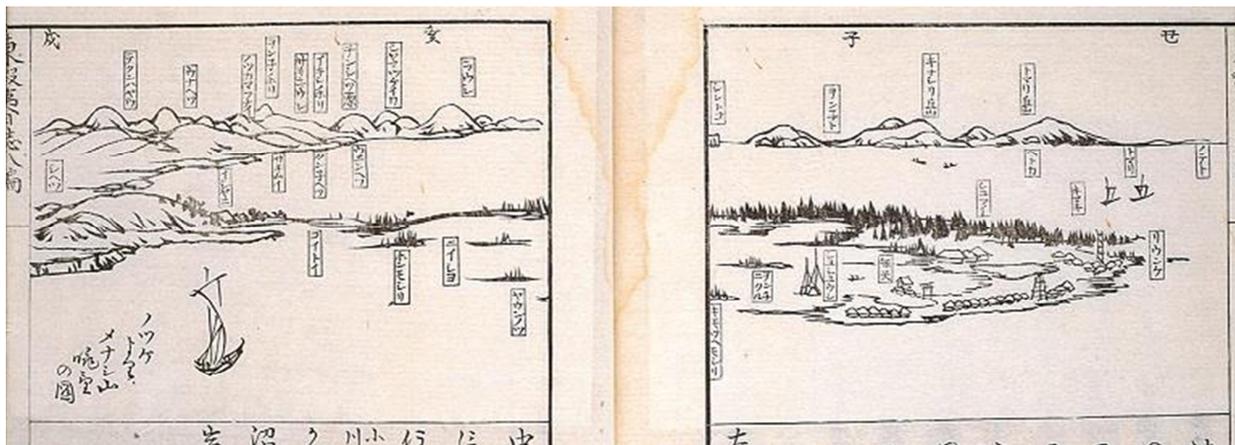
武四郎と伝蔵の出会いは、1856年(安政3)と思われます。『竹四郎廻浦日記 巻の二十五』に伝蔵とアイヌが開いた畑の作物が紹介されています。



松浦武四郎

その後の出会いは、1858年(安政5)で、4月28日、根室会所を出発し、翌29日、ベツカイ(別海町本別海)に到着します。ここで、伝蔵に迎えられ、船で海岸線を北上し夕方ノツケ(野付通行屋)に到着しました。夜には、間宮林蔵と樺太に行ったシンバフというアイヌと1845年(弘化2)の調査以来の再会を果たしました。また、伝蔵と畑作づくりを行っているアイヌの茶右衛門にも会い、手当てなどを与えました。5月1日、シレットコへの旅へ向かうために土地に詳しいアイヌを伝蔵お願いし、ノツケを出発しました。

伝蔵の日記にも同様なものが書かれており、武四郎は、伝蔵の勤める野付通行屋に二泊しました。メナシのアイヌたち、そして伝蔵との交流を深めたと思われます。



「東蝦夷日誌・ノツケよりメナシ眺望之図」松浦武四郎

別海町郷土資料館だより No.296

発行日 令和6年3月1日  
発行所 別海町郷土資料館  
別海町別海宮舞町30番地  
電話 0153-75-0802 (FAX兼)

編集後記

冬の野鳥観察会では、条件が良く多くのワシをまじかに観察することが出来ました。鳥次第の観察会なので、とても幸運でした。風もなく暖かく、果てしなく広がる氷原の風景も道東ならではの風景だと思います。それにしては年度末となり1年は、本当に早いと感じます。